

町の天使

小川未明

青空文庫

えす Sという少^{しょうねん}年^{ねん}がありました。

まいにち 毎日、学^{がっこう}校^{がっこう}へゆくときも、帰^{かえ}るときも、町^{まち}の角^{かど}にあつた、菓子^{かし}屋^やの前^{まえ}を通^{とお}りました。その店^{みせ}はきれいに飾^{かざ}つてあつて、ガラス戸^どがはまつていて、外^{そと}の看^{かん}板^{ばん}の上^{うへ}には、翼^{つばさ}を拵^{ひろ}げたかわいらしい天使^{てんし}がとまつて、その下^{した}を通^{とお}る人^{ひと}々^{びと}をながめていたのであります。

少^{しょうねん}年^{ねん}は、すこし、時^じ間^{かん}のおくれたときは、急^{いそ}いで、夢^{むちゆう}中^{ちゆう}でその前^{まえ}を過^すぎてしまいましたけれど、そうでないときは、よくぼんやりと立^たち止^どまつて、毎^{まい}日^{にち}のよう^{よう}に見^みる天^{てん}使^しを、飽^あかず^ずに仰^{あお}いでいることがありました。

なぜなら、その天使は、あちらの雲切れのした、北の方の青い空から飛んできて、ここにとまったようにも思われたからでした。少年には、それほど、あちらの遠い空が、なんとなくなつかしかったのであります。そして、その天使と青い空とを結びつけて考えると、美しい、また愉快ないろいろな空想が、ひとりだけに、わいてきたからであります。

「おまえは、いつ、あのあちらの空へ帰ってゆくのか？」と、小さい声でいったりなどしました。しかし天使は、ただこれを聞いても笑っているばかりでした。

雨の降る日も、天使は、そこにぬれながらじつとしていました。また、霧の降った日も……。けれど、少年は、夜になって、

おおぞら
 大空がぬぐわれたように星晴れがして、寒い風が吹く真夜中には、きつと、天使が自由に、あの翼をふるって、大空を飛びまわるのであろうと思ひました。けれど、人は、だれもそれを知らない。そして、天使は、いつもじつとしているとばかり思ひつゝるのだと考へました。

「僕は、おまえが、夜になつて、だれも人間が見ていないときに、空を飛びまわるのを知つてゐるのだよ。」と、少年は、天使に向かつていいました。

こういつても、天使は、ただ黙つて笑つてゐるばかりでした。
 エスしやうねん
 S 少年は、病氣にかかりました。

もう幾日も学校を休んで、一間にねていました。そのうち

に、秋もふけて、いつしか冬になりかかり、木がらしが家のまわり、吹きすさんだのであります。いろいろの木立の葉が、ざわざわといつてささやきました。そして、はげしい風の襲うたびに、それらの葉たちは、ちようど火の子のように、大空に飛び上がり、あてもなく野原の方へと駆けてゆくのでした。

少年は、窓から、いつしか、さびれきつた庭の中をながめていました。かしの木の下に、たくさんどんぐりが落ちていました。また、あちらの垣根のところには、からすうりが、いくつかく赤くなつてぶらさがっていました。ここから見ると、たいそう寒く、さびしい林の中ではあつたけれど、そこにはいい知れぬおもしろいことや、楽しいことがあるとみえて、いろいろの小鳥がや

つてきて、枝から枝へ飛びうつつては、鳴いているのが見えるのであります。

「もう、じきに雪がくるだろう……。」と、少年は思っていました。

「戸を開けて、寒い風に当たつてはいけませんよ。」と、お母さんにいわれて、少年は、また床の中にはいりました。そして、あいかわらず、家の外にすさぶ木がらしの音を聞いていました。

「早く、病気がよくなつて、学校へいきたいものだな。」と、少年は思いました。けれど、それまでには、なかなかよくならなかつたのであります。

お友だちは、遠慮をして遊びにきませんでした。少年は、

もう長いこと、お友だちの顔を見ません。そんなことを思つて、さびしがっていました。

ちようど、そのとき、あらしの中をだれか自分を呼びにきたものがあります。

「Sちゃん、遊ぼう！」と、外で自分を呼んでいました。

はじめは、気のせいではないかと考えました。それで、しばらく、床の中で、じつと考えていました。あらしの音は、いよいよはげしくなつて、林の鳴る音や、落ち葉の風にまかれて飛ぶ音などがしていたのであります。また、このあらしの間にまじつて、「Sちゃん、遊ぼう！」と、自分を呼んでいる子供の声がきこえてきました。

「だれだろう？」と、少年しょうねんは思おもつて、床とこから出でて窓まどの障子しょうじを開ひらきました。すると、あちらに、赤い帽子あかぼうしをかぶった二人ふたりと、黒い帽子くろぼうしをかぶった一人ひとりの子供こどもが、三人にんでおもしろそうに遊あそんでいて、自分じぶんを手招てまねぎしたのであります。

「だれだい？」と、少年しょうねんは呼よびかけて、その三人にんをじつと見み守まもりました。すると、一人ひとりは年としちやんで、一人ひとりは正しょうちやんであり、一人ひとりは黒い帽子くろぼうしをかぶっている子供こどもは、まったく知しらない子供こどものように思おもわれました。

「年としちやんに、正しょうちやん、君きみは、どうしたんだい、死しななかつたのかい。不思議ふしぎだなあ……。」と、少年しょうねんは、死しんだはずの二人ふたりの友ともだちが、このあらしの吹ふく日ひに、どこからか帰かえつてきて、

自分を誘いにきたのを、少なからず不思議に考えたのでした。

三人は、しきりに、自分を手招ぎしていました。少年は、

お母さんに聞いてみて、すぐにも外へ出ていこうと思いました。

彼は、ふらふらとへやの中を歩いて、茶の間の方へ行って、

「年ちゃんと正ちゃんが迎えにきたから、いつてもいい？」と、

お母さんにたずねました。すると、お母さんは、走ってきて、

「なんで、おまえはねていないのです。」と行って、しかられま
した。

少年は、年ちゃんと、正ちゃんが外で呼んでいるから、二人を家へいれてくれと頼みました。

「僕、さびしくて、しかたがないんだから……。」といいますと、

お母^{かあ}さんは、青^{あお}い顔^{かお}をして、目^めを大^{おお}きくみはつて、少^{しょう}年^{ねん}をにらみました。

「なんで、年^{とし}ちやんや、正^{しょう}ちやんが、おまえを呼^よびにくることがあるものか。おまえは、夢^{ゆめ}を見^みたんだよ。」といいました。

少^{しょう}年^{ねん}は、それを打^うち消^けすようにして、

「お母^{かあ}さん！ ほんとうに、外^{そと}で僕^{ぼく}を呼^よんでいたんですよ。うそ

だと思^{おも}つたら、見^みてごらんさい。」と、少^{しょう}年^{ねん}はいいました。

「じゃ、私^{わたし}が見^みてみよう。そして、もしいたら、しかつてやろう

！」と、母^{ははおや}親^{おや}はいつて、窓^{まど}から、あちらを見^みました。

「だれもいないじゃないか。おまえは夢^{ゆめ}を見^みたのだよ。」といつ

て、母^{ははおや}親^{おや}は、寒^{さむ}いので、障^{しょう}子^じをぴしりと閉^しめてしまいました。

その日から、少年の病気は、いつそう重くなつたので、家の人たちは、みんな心配したのであります。

少年は、窓からのぞいて見ると、お菓子屋の看板の上にとまっている天使が、ひとりで、あらしの中に遊んでいたのです。

「君は、いつも真夜中になると、人の知らない間に空を飛んで、星の世界へいったり、また林の中へはいったりして遊んでいるのだらう……。」と、少年はたずねました。

天使は、はずかしそうな顔をして笑っています。

「今日は、空がよく晴れて、それに風が寒いから、つい天国が恋しくなつて、飛んでいました。」と、天使は、答えました。

少年しょうねんは、あちらの青い空あお そらが、ただなんということなしに慕したわしくなりました。それに、海うみの方ほうへといつてみたくなりました。「僕ぼくをつれていつてくれないか？」と、天使てんしに向むかって頼たのみました。

小さな天使ちい てんしは、しばらく考かんがえていましたが、魔術まじゆつで、少しょうね年ねんを小ちいさく小ちいさくしてしまいました。

「さあ、しっかりと私の脊中わたし せなかにお負おさりなさい。」と、天使てんしはいました。少しょうねん年ねんは、天使てんしの白しろい脊中せなかにしっかりと抱だきつきました。いつしか、青あおい空そらと白しろい雲くもの間あいだを縫ぬうようにして、飛とんでいたのであります。

目めの下したには、海うみが、悲壯ひそうな歌うたをうたつて、はてしもなく、うね

りうねりつづいていました。風は、吹いて、吹いていました。少年を乗せた、天使は、北へ、北へと旅をつづけたのであります。

そのうちに、紅い潮の中から、一つの美しい島が産まれました。天使は、その島の空を飛びまわりました。見下ろすと、そこには、真っ白な大理石の建物が、平地にも、丘の上にもありました。その有り様は、見たばかりでも神々しさを覚えたのでした。どんな人がこの島の中に住んでいるだろうか？ 少年は、もし美しい人たちで、自分を愛してくれるような、やさしい人々であつたら、自分はこの島に住みたいと思ひました。しかし、その島は、こんなふうには神々しさがあつたけれど、しんとして音ひとつ

しなければ、また煙けむりの上のつているところもありませんでした。地ち
 上うえに、赤あかいところや、白しろいところの見みえるのは、花はなが咲さいてい
 るのだと思おもわれました。そのうちに、下したの道みちを白しろい衣服いふくをまどつ
 人ひと々びとが、脇わき見みもせずあるに歩いていくのが見みえました。その人ひと
 々とは、尼あまさんが会かい堂どうへゆくときのようはなしに、笑わらいもしなければ、
 話はなしもしませんでした。これを見みると、体からだじゆうさむに寒もよおけを催もよおしまし
 たので、この島しまへ降おりてみようとは思おもわなくなりました。
 「あんまり遅おそくなると、みんなが心しん配ぱいするから、もう、かえり
 たい。」と、少しょう年ねんは天てん使しにいいました。
 小ちいさな、美うつくしい翼つばさを持もつた天てん使しは、たそがれ方がたの空そらを矢やのよう
 に、速すみやかに飛とんで、ふたたびなつかしい、わが家やの見みえる野の原はら

の方へと飛んできました。

「さあ、ここですよ。」といって、天使がおろしてくれましたので、ほっとして少年は、目を開きました。

すると、自分のまくらもとには、心配そうな顔つきをした医者、青い顔をしたお母さんと、妹と、お父さんたちがすわって、自分の顔を見つめていたのでした。

少年は、どうしたことかと思つて、不思議でならなかつたのです。

それから、数日たちました。少年の病気は、いいほうに向かいました。医者は、眉を開いて笑いました。母親の顔にもはなやかな笑いが浮かびました。

あいかわらず、あらしは、窓の外まどそとに吹ふいて、雪ゆきすらおりおり、風かぜにまじって落ちおてきました。けれど、そんなに深ふかくは積つもりませんでした。そのうちに、少年しょうねんの病びょう気きはまったくよくなつて、元げん気きよく学が校こうへ通かようことができるようになったのであります。

ある日ひ、少年しょうねんは、菓子屋かしやの前まえを通とおりかかつて、天使てんしは、どうしたろうと思おもつて、仰あおいでみますと、そこにはありませんでした。驚おどろいて友ともだちに聞きいてみますと、いつかの大おおきなあらしのとき、落おちて壊こわれてしまったといいました。少年しょうねんは、すこしいくと、道みちのはたに天てん使しの翼つばさのかけらが落おちていたのを見みつけました。少年しょうねんは、天使てんしが、いよいよ大おお空ぞらに上のぼつてしまったのだ

ろうと思^{おも}いました。それから、つぎの休^{やす}み日^びに凍^{こお}った雪^{ゆき}の上^{うえ}を渡^{わた}つていくと、林^{はやし}の中^{なか}に赤^{あか}い帽^{ぼうし}子^しが一つ落^おちていたのであります。

——一九二五・一〇——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集1」丸善

1927（昭和2）年1月5日発行

初出：「赤い鳥」

1926（大正15）年1月

※表題は底本では、「町《まち》の天使《てんし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

町の天使

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>